

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団  
2015年度（後期）「在宅医療研究への助成」完了報告書

「がんサロンの教育的効果の検証  
—対人援助職の望ましい変化に着目して—」

申請者：井上 祥明  
所属機関：国立病院機構 別府医療センター  
提出年月日：平成 29 年 3 月 31 日

## I. 研究背景

がんサロンが、がん患者やその家族に与える効果は様々な形で述べられている（高山 2014、黄ら 2011 など）。しかし、がんサロンはがん患者や家族だけでなく、「専門職自身の実践を豊かにするという大きな利益をもたらす」（岩間 2000）、「潜在的に専門家に貢献する」（大木 2010）とも言われている。このような観点から、がんサロンは専門職の教育の場としても有効であるのではないかという仮説を設定した。ここでの教育とは広辞苑（第5版）の「教え育てること。人を教えて知能をつけること。人間に他から意図をもってはたらきかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」を採用した。

このような状況を踏まえ、先行研究として、当院の主催する地域型がんサロンにファシリテーターとして参加する訪問看護師、ケアマネジャー、医療ソーシャルワーカー3名を対象に、がんサロンに参加した事で通常業務では得る事が困難と思われる「望ましい変化」が起きたのかについてインタビューを行い、テキストデータ化し、グランデッド・セオリー・アプローチを参考にカテゴリーを抽出した。その結果、表1のように5つのカテゴリー、12個のサブカテゴリーが抽出された。

カテゴリー	サブカテゴリー
1 対人援助職としての視点の変化	1 対人援助職として視野が広がった
	2 がん患者の生活者としての部分が見えた
	3 がんという疾患のイメージが変わった
2 対人援助職としての視点の変化役割意識の変化	4 がん患者の体験談を次のケースに繋げる役割に気付いた
	5 がんサロンに繋げやすくなった
	6 がん相談支援センターに繋げやすくなった
3 がん患者に対する意識の変化	7 がん患者の強さを知った
	8 がん患者のイメージが前向きなものに変わった
4 対人援助職としての知識の変化	9 患者同士の支えあいの効果を知った
5 援助者とクライアントの関係性の変化	10 がん患者に関することの敷居が下がった
	11 がん患者との仲間意識を持った
	12 その場にいる事で支援者も元気をもらった

上記の結果のように、がんサロンに参加した対人援助職は、通常業務では得る事ができない様々な変化を実感していた。

がんサロンは、がん診療連携拠点病院のがん相談支援センターや緩和ケアチームなどの一部のスタッフのみで運営されていることが多いと推測されるが、今回の質的分析結果を踏まえると、がんサロンの運営に一部のスタッフだけではなく、病棟看護師や、ケアマネジャーや訪問看護師などの様々な対人援助職が関わり、参加する事で、対人援助職の教育の場としても有効ではないだろうか。しかし、先行研究だけではがんサロンが対人援助職の教育の場として有効であると実証する事は不可能である。そこで、先行研究で抽出したカテゴリーの改変と論理性を担保させる事を目的に他地域のがんサロンに参加する対人援助職（看護師、心理職、ソーシャルワーカー）にインタビュー調査を実施し、アンケート表を作成し量的分析を行い、がんサロンの教育的効果の構造分析を行うことを本研究の目的とした。

## II. 調査方法

全国のがんサロンで参加経験を有する看護師、心理職、ソーシャルワーカー10名に対し、がんサロンに参加したことによって自分自身が感じた望ましい変化についてインタビューを行い、テキストデータ化し、グランデッド・セオリー・アプローチを参考にカテゴリーを抽出したところ、35項目が抽出された。その結果をもとにアンケート用紙を作成し、5件法にて回答を求めた。

対象は全国のがん診療連携拠点病院に所属し、がんサロンへ参加している看護師、心理職、ソーシャルワーカー（社会福祉士）の3職種とし、郵送法にて行った。調査実施期間は2017年2月10日～2017年2月24日とした。

## III. 分析方法

分析方法は、がんサロンの教育的効果に関する35項目の構造を明らかにするため、バリマックス法による直交回転で因子分析を行った。質問項目の内的一貫性（信頼性）に関しては、Cronbachの $\alpha$ 信頼係数で検討した。調査データの統計解析には、SSRI社 Excel 統計2012を用いた。

## IV. 結果

### (1) 回答者の属性およびサロンの取り組み状況

回答者の属性（年齢、性別、職種、職種経験年数、がん患者支援の経験年数、がん専門相談員の経験年数）、がんサロンの実施状況と形態、がんサロンの内容、ファシリテート機能、業務上の位置づけについて別紙1に示す。

特徴的な回答としては、回答者の86.8%が女性で、職種としては50.5%が看護師であった。主に参加しているがんサロンは94.7%が自院で開催しているがんサロンであり、開催頻度としては58.2%が月1回であった。がんサロン1回あたりの平均的な参加人数は10名以下が73.9%であり、1回あたりの新規参加者は0～3名までが88.3%を占めていた。

がんサロンでイベントの実施の有無については51.3%が実施しており、イベントを実施していると答えた回答者の95.4%がイベントでがんサロンが活気付くと答えている。がんサロンで患者同士の対話の時間は1時間以上が54.4%であり、患者同士の対話が重要な要素だと98.8%が回答している。

専門職によるファシリテートが行われているがんサロンは70.7%であり、専門職によるファシリテートの必要性については64.3%が必要と答え、66.1%が専門職によるファシリテートががんサロンでの支援効果を高めていると回答している。

がんサロンのやりがいについては80.9%がやりがいを感じているが、一方では35.2%の方はがんサロンが業務上の負担に感じていた。がんサロンが上司や同僚に認められていると感じる割合は6割程度であるが、病院全体として力を入れていると感じる割合は3割に満たなかった。

### (2) 因子分析によるがんサロンの教育的効果

因子分析の結果を表2に示す。質的研究により抽出された35項の質問項目について因子分析をした結果、項目間で共通の因子を形成しなかった20項目が除かれ、残り15項目による3因子までの固有値が1.62であり、3因子構造であると解釈された。また、Cronbach  $\alpha$ 係数は0.908と信頼性は確保された。3つの因子をそれぞれ「がんサロンが人生を支え合える場であるという認識の変化」、「がん患者理解と対人援助職としての価値の変化」、「対人援助職としての技術の変化」と解釈した。

表2 がんサロンの教育的効果因子分析効果

項目	因子負荷量		
	F1	F2	F3
<b>因子1 がんサロンが人生を支え合える場であるという認識の変化</b>			
がんサロンは、同じ立場の者同士だから話せる場だと分かった	.689		
がんサロンが生き方について考える場でもある事が分かった	.712		
がんサロンが情緒的支えあいの場である事が分かった	.810		
<b>因子2 がん患者理解と対人援助職者としての価値の変化</b>			
がん患者の多様な価値観を理解できるようになった		.456	
がん患者の家族の話を書くことで家族の心理的苦悩を知った		.535	
がん患者の病期や心理状況に応じた支援方法を理解できるようになった		.486	
がん患者の家族同士の支え合いの意味を理解できるようになった		.599	
患者と家族の多様な価値観を考えて支援をできるようになった		.555	
がん患者の姿に触れ、患者の強みを伸ばす援助の重要性を理解できるようになった		.524	
がん患者と「がん」や「がんの体験」について話を聞くことができるようになった		.461	
<b>因子3 対人援助職者としての技術の変化</b>			
死やタブーとして扱っていた話題にも支援者として関わることができるようになった			.429
ファミリーテート技術が向上した			.683
患者の個性性を踏まえた援助ができるようになった			.613
コミュニケーション技術が向上した			.737
ストレングスを活かした支援ができるようになった			.685

## V. 考察

がんサロンが人生を支え合える場であるという認識の変化が抽出されたことは、がんサロンに参加する事で、患者同士が人生を互いに語り合い、共に情緒的に支え合う姿を見ることができたからではないだろうか。日常的な臨床現場では患者や家族と個別関係が関わり合いの主になるため、患者同士の生き方を聴かせてもらうという経験をする事は少ないだろう。がん治療中の患者や家族が治療中やこれからの人生に不安を抱き言葉を漏らした時、対人援助職は傾聴し、専門的なアドバイスをすることができるであろう。しかし、がんサロンで患者同士が支え合っている事を認識していれば、がんサロンでどのような事が行われているか説明でき不安を抱いている患者や家族の不安の軽減に繋がる手段の一つとして情報を提供できるようになるのではないだろうか。

がん患者理解と対人援助職としての価値の変化が抽出されたことは、がんサロンに参加し、がん患者や家族の苦悩や多様な価値観についてゆっくり時間をかけて聴く事ができ、日々の臨床では聴く事ができないような話に触れたことにより、対人援助職が持つべき価値観の変化をもたらしたのではないだろうか。価値とは、「価値は現実が志向されるある理想的な状態・条件をさす。それは、人間主体の諸行為を発動する源としての位置にあり、あるべき行為を導く判断基準としての働きをするもの」(秋山ほか2004)とされているように対人援助職にとって重要な要素である。しかし、日々の業務の中では、各々の対人援助職として持つべき価値を実感しながら行動の基盤とできているだろうか。ま

た、その価値観が個人的な価値観なのか専門職としての価値観なのかを問うという事は多忙な日々の中で考える事は困難かもしれない。しかし、がんサロンでは十分な時間を費やしながらか話を聞く事ができるので我々が持つべき価値を振り返る機会になると考えられる。

対人援助職者としての技術の変化が抽出されたことは、がんサロンでファシリテーターとしてグループをまとめながらも個別性を重視していくような環境を経験していく事ができるからではないだろうか。

主な診療機能が急性期治療となるがん診療連携拠点病院に勤務する対人援助職者は日々の業務でグループ療法を行う機会はそう多くはないだろう。しかし、がんサロンでは自院の患者や家族以外のがん患者など初対面の方を含めたグループをファシリテートしていく技術が必要になる。また、ファシリテートしていく中で患者や家族の個性を見つけ、引き出しグループを成立・活性化させていくよう働きかけを行っていくので、対人援助職としての技術の変化に繋がっていくのではないだろうか。

## VI まとめ

本研究では、がんサロンにおける教育的効果の検証を行い、がんサロンの教育的効果の検証を行った。

がんサロンは平成19年のがん対策推進基本計画において、「がん患者や家族等が、心の悩みや体験等を語り合うことにより、不安が解消された、安心感につながったという例もあることから、こうした場を自主的に提供している活動を推進していくための検討を行う」と明記されたところから全国的に広がったと考えられる。がんサロンががん患者やその家族に与える効果的な影響については、様々論述されているが、今回はがんサロンが対人援助職にもたらす効果について検証することができた。検証の結果、3つの因子が抽出され、がんサロンが日常業務では得ることのできない望ましい変化をもたらす可能性を示唆する事ができた。

対人援助職は日々、自己研鑽しながら持つべき価値や技術を獲得していかなければならない。経験学習理論に基づくと、日々の臨床が学びの連続であるように、がんサロンも価値や技術を学び、望ましい変化を得る事が出来る場として認識し、積極的に参加する機会を得る事は対人援助職にとっても有益な事であると考えられる。

しかし、本研究ではがんサロンに関与する職種別や労働環境別での検証を行う事ができていないので今後は更に論及し新たな知の発見に繋げていけるよう邁進していきたい。

## VII 謝辞

本研究は、2015年度公益財団法人 在宅医療助成（後期） 勇美記念財団の助成を受けて実施いたしました。ここに、深く謝意を申し上げますと共に、本研究において、インタビューやアンケート調査に協力いただいた皆様にも心より感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

独立行政法人 国立がん研究センターがん対策情報センター(2014)『がん専門相談員のためのがんサロンの設立と運営のヒント集』.

黄正国・館野一宏・山村崇尚ら (2011) 『がん医療におけるセルフヘルプ・グループ研究の展望』 広島大学大学院教育学研究科紀要

大木秀一・谷本千恵 (2010) 『コミュニティにおけるセルフヘルプグループを基盤としたサポートネットワークシステム研究の今日的課題と展望』 石川看護雑誌

岩間文雄 (2000) 『セルフヘルプ・グループと専門職の共同のために』 関西福祉大学研究紀要

秋山智久・平塚良子・横山穰(2004) 『人間福祉の哲学』 ミネルヴァ書房.

別紙1 がんサロンにおける対人援助職の変化についての調査

(n=472)

【調査1】属性

1. 年齢

20歳以上～30歳未満	41
30歳以上～40歳未満	155
40歳以上～50歳未満	153
50歳以上	122

2. 性別

男性	62
女性	409

3. 職種

看護師	238
ソーシャルワーカー	183
心理職	50

4. 職種の経験年数 Ave:18.0 Median:17.0

1年～5年	57
6年～10年	83
10年～20年	155
20年以上	173
回答なし	3

5. がん患者支援の経験年数 Ave:9.8 Median:8.0

1年～5年	168
6年～10年	137
10年～20年	112
20年以上	45
回答なし	9

6. がん専門相談員の経験年数 Ave:4.4 Median:4.0

1年以下	81
1年～3年	125
3年以上	220
回答なし	45

【調査2】がんサロンの取り組み状況について

質問1 がんサロンの実施状況と形態

1. がんサロンに参加し始めてからの年数

1年未満	82
1年～3年未満	184
3年以上	205

2. 主に参加しているがんサロンについて

自院で開催している	446
院外で開催している	6
自院以外が主催するがんサロンに参加している	12
自院と院外両方に参加	4
回答なし	3

3. サロンの開催頻度

月1回未満	49
月1回	274
月2回	49
不定期	12
その他	87

4. がんサロンに参加する頻度

月1回未満	78
月1回	179
月2回	41
不定期	92



5. サロン1回あたりの平均的な参加人数

1名～5名	161
6名～10名	187
11名～15名	80
16名以上	40
回答なし	3

6. 新規参加の人数

0名～1名	243
2名～3名	173
4名以上	45
回答なし	10

質問2 がんサロンの内容について (1)

1. 医療情報講演を実施している

はい	310
いいえ	159
回答なし	2

2. 医療情報講演は、多くを占めている

はい	82
いいえ	229

質問3 がんサロンの内容について (2)

3. イベントを実施している

はい	239
いいえ	227

4. イベントでサロンが活気づく

とてもそう思う	106
そう思う	140
あまりそう思わない	11
全くそうおもわない	1

質問4 がんサロンの内容について (3)

5. 患者同士の対話時間

30分未満	47
30分～1時間未満	166
1時間以上	256
回答なし	2

6. 患者同士の対話が重要な要素と思いますか

とてもそう思う	395
ややそう思う	70
あまりそう思わない	2
全くそう思わない	0
回答なし	4

質問5 ファシリテート機能について

1. 専門職によるファシリテートが行われている

とてもそう思う	107
そう思う	226
あまりそう思わない	97
全くそう思わない	40
回答なし	1

2. 専門職によるファシリテートは必要だ

とてもそう思う	59
そう思う	244
あまりそう思わない	146
全くそう思わない	15
回答なし	7

3. 専門職によるファシリテートすることは、支援効果を高めている

とてもそう思う	62
そう思う	249
あまりそう思わない	138
全くそう思わない	13
回答なし	9

質問6 業務上の位置づけについて

1. やりがいを感じる

とてもそう思う	79
そう思う	302
あまりそう思わない	77
全くそう思わない	5
回答なし	8

2. 業務上負担になっている

とてもそう思う	26
そう思う	140
あまりそう思わない	245
全くそう思わない	54
回答なし	6

3. 上司に認められていると感じる

とてもそう思う	76
そう思う	218
あまりそう思わない	132
全くそう思わない	37
回答なし	8

4. 同僚に認められていると感じる

とてもそう思う	61
そう思う	255
あまりそう思わない	129
全くそう思わない	20
回答なし	6

5. 部署で力を入れている

とてもそう思う	47
そう思う	225
あまりそう思わない	165
全くそう思わない	27
回答なし	7

6. 病院全体で力を入れている

とてもそう思う	19
そう思う	122
あまりそう思わない	246
全くそう思わない	75
回答なし	9

7. 時間は確保されている

とてもそう思う	121
そう思う	252
あまりそう思わない	77
全くそう思わない	15
回答なし	6

8. 形式的に行われていると感じる

とてもそう思う	23
そう思う	162
あまりそう思わない	233
全くそう思わない	48
回答なし	5

9. 患者本位であると感じる

とてもそう思う	65
そう思う	248
あまりそう思わない	140
全くそう思わない	11
回答なし	7

